

子供とおとなの端境期

—からたちの花のトゲは痛いよ—

三中32回 竹岡勝美

私たち同期生の大半は、昭和五年に小学校に入学、翌六年九月には満州の柳条溝における鉄道爆破に端を発した満州事変勃発。十一年に中学校に入学、翌十二年七月には北京郊外の蘆溝橋の紛争から生じた日中戦争（支那事変）と文字通りの軍国少年として育った。中学一年の頃、北満州で陸軍の軍事探偵が中国兵に殺され、「その名も中村震太郎、ゆくては遠き興安嶺」と唄ったものである。

中学一、二年では必須科目であつた音楽の試験では岩本恒雄先生が勇ましくピアノで弾ずる軍歌「土も草木も火と燃ゆる果てなき曠野踏み越えて 進む日の丸鉄兜」と個々に独唱させられた。生来歌にはオンチである級友は歌詞も覚えずピアノにもついていけず、眼を白黒させる始末。日中戦争が始まると相次ぐ南京や漢口の陥落で私たちも提灯行列や旗行列に参加させ

られた。四才年長の兄が購読していた講談社の月刊誌「少年倶楽部」に連載されていた山中峯太郎著の「星の生徒」の陸軍幼年学校に憧れた。田河水泡連載の漫画「ノラクロ二等兵」が士官に進級するまで愛読した。南洋の土人相手の島田啓三の漫画「冒険ダン吉」もむさぼり読んだ。

軍国時代の荒波にもまれながらも私たちは恩師の愛情に恵まれ級友の友情に満たされながらもとととなの端境期にある充実かつ愉快極まる五年の少年時代、中学生活を乗り切って行った。

今、私には京三中同期会のほかに旧制高等学校時代、小学校時代の同期会も年に一度開かれるが前者は既に固まりきった険しい人生観、政治論議の垣根を超えきれぬギョチなさが残り、小学校時代はあまりにも幼い。中学時代の同期会はお互いに固いことは言わず共に楽しんだ少年時代を恩師やお互いのアダ名で呼び交い、愉快的思い出のみで話の花が咲く。私も「カッチン！」と呼ばれ、はるばる東京から参加するのゆえをもって時には乾杯の音頭もとらされる。見合わず顔にヤンチャでゴンタな童顔がかぶさり合う。数時間の会合が終えて帰京する新幹線の車中の二時間半、あまりの楽しさに包まれた身の倅せに、老年に迫る死の恐怖に遙かに優る友情の歎びにひたるのであった。

京三中は京一中に次ぐ優秀校であり受験も二倍（？）の難関

であった。私の母校亀岡小学校から六人が合格し、周辺隣村から二人が入った。京三中に自信のない学友は園部中学校に入学した。それでも私の小学校同級の男子二十人中、中学へ進学した者三人、商業学校に進学した者二人、残りの十五人は小学校の二年間の高等科卒業後家業を継ぐか京都市内や大阪市内に働きに出た。中学校や商業学校出身者は徴兵されても幹部候補生出身の士官となったためか戦死者はでなかったが小学校出身者は下士官か兵どまりでレイテ、ビルマ、中国で戦死した者が六人も出た。戦後の今は六・三・三制で全員が中学校に進学し、最近ほぼ全員が高校に進学すると云う。しかも男女共学で。戦後のマス教育がその質を低下させたと嘆き、教育基本法廃止の声もあるが、最近の大災害に大量のボランティアに若者の参加する姿に私は感動し高等教育が平等化された戦後教育を評価している。

私たち亀岡出身者は夏は六時四十五分、冬は七時十二分亀岡駅発の山陰線の蒸気機関車で花園駅まで三十分の汽車通学であった。今の「トロッコ」電車で有名な保津川下りの景勝を眺めつつ八箇所のトンネルをくぐり抜けて行く。夏は暑くてトンネルで窓を開くと機関車の煤煙のガスが眼に入ってくる。一番長いトンネルでは息をつめあう競争もした。幸い中学三年からジーゼルカーが走り出し快適な冷風を満喫した。下校には列車に

間に合うように鞆をぶらさげながら疾走することもあり、折角間に合っても僚友が腹痛をおこし駅の便所に飛び込み見捨てるわけにいかず次ぎの列車を待つこともあった。

嵯峨駅から乗り込む京三中生もいた。一年下の平田高子（精耕）君は今は嵯峨天竜寺の管長に登り詰められている。現在は保津川下りの遊船の帰りの船はトラックに積んで戻るが当時は水夫が船につけた綱を肩にして溪流を遡り岩と岩を飛ぶようにして引つ張り挙げていた。人はこれらの水夫を「サル」と呼んでいた。この亀岡の「京三中汽車通会」は今も年一回開かれ私も参加している。

京三中の一学年は生徒二百人、五十人ずつ甲・乙・丙・丁の四組に編入されていた。この級名に優劣は無かった。一番甲、二番乙、三番丙、四番丁、そして五番丁、六番丙、七番乙、八番甲と逆まわりを繰り返して平準化が計られていた。そのため毎年組を替わる者もいた。殺生な話であるが一学期二学期末は各級ごと、三学期末には全学年で氏名入りの成績順が校内に掲示された。

組担当の受け持ち先生は替わらなかった。

甲組は、絹笠梅次郎先生（英語・アダ名サバ・水泳部長、プールでの水泳大会で模範泳法された先生のスピードの遅さにガ

ツカリ、先生のご長男は我々の級友であつた。

乙組は、大井潔先生（数学・アダ名モツサリ・柔道部長、小柄ながら若い時は堺大浜での相撲大会で優勝された自慢の型を披露、五年卒業時に有名上級校に合格できるように一年生からの受験勉強の計画を懸命にご教示戴いた。幸い京三中として四年ぶりに四年修了で第三高等学校に合格した者、しかも二人であつたことは先生もご本懐であつたろう）。

丙組は、清水初太郎先生（博物・アダ名ハッチャン・山岳部長）。

丁組は、楠正先生（歴史・若い美男子、私は受け持ちされたことは無かつたが、昭和六十年頃、元防衛庁高官の身で有りながら、平和・軍縮・護憲の私見を発表したことに楠先生から熱烈なご支持を頂いていることを同期の山村進君に教えられ、先生のご葬儀にはそのお棺を担がせて頂いた。当時、国府田登先生（体操）小寺政太郎先生（国語）からもご激励のお手紙を頂き京三中に学んだ身の倅せを嘯み締めた。）

入学当時の体操の先生は吉松隆喜先生であつた。運動場の片隅に立てられた低鉄棒。運動オンチの級友には鉄棒をシツカと握りしめながら尻どころか脚すらも上がらず立ちすくむ者もいた。吉松先生は周囲の垣根のからたちの花から抜いてきたトゲをおもむろにその級友の鼻先に当て「からたちの花のトゲは痛いよ」と唄われたものである。同じく入学当初は新装成った体

育館には田舎育ちの私たちには初めての洋式便所が付いていた。教練担当の五十嵐兵蔵先生（常に軍服着装の予備曹長、アダ名はトンガラシ）はその便所にまたがりズボンまでは下ろされなかったがしゃがみこみ、頭上にぶら下がる鎖状の紐を引っ張りザアツと水を流して見せて頂いた。同じ教練担当の予備曹長に伊東市三先生（アダ名ロスケ）も居られた。五十嵐先生は雨で教練が屋内になった時、教室で「向こうに見えるのは黒板村の敵陣、こちらは味方の戸口村」と並ぶ机の間をヒラリヒラリと身をかわされての図上訓練を展開された。屋外の徒歩訓練では北山の墓所に連れて行かれ「これが有名な目玉の松チャンの墓」（尾上松之助、チャンバラ活動写真の名優）と案内された。先生のご居宅は京三中から花園駅を超えた集落にあった。先生のご通勤には立派な八字髭をピンと撥ね、軍服姿にムンズと腰の佩刀の柄を握り、ハッタと前方を睨み付けながらの堂々たる闊歩ぶりであった。その先生にも学校の園芸で採れたカボチャ、ナス、キュウリ等の配当があった。軍服姿で持参するわけにいかず、この時こそ我々汽車通が喜んでお役に立つ時であった。

一年生の夏は有志のみが参加する三重県津市阿漕浦の海水浴場での観海流水練の合宿訓練があった。一年生で小さな者はまだ尻の殻も取れていない子供である。夕食後の合宿所のお寺で

夕闇が迫る頃誰かが口ずさむ「故郷」の歌に声を合わせ「父恋し、母恋し」の涙にくれて歌うのであった。五年生は朝から夕方まで五里の遠泳を泳ぎ切った。私たちもお情けで「三丁」の免状を貰った。一年生の秋は植物園の府下陸上競技の応援練習である。昼休みに行列しながら腰を下ろし、五年生など上級生の大声のリードに合わせて「いでや歌いて共に舞はん！」と声をかぎりに合唱するのであるが音楽オんチの級友には歌詞すら覚えず口をモゴモゴ動かしている。メガホンを耳に当てた五年生が目ざとくそのオんチを見だし、メガホンをその口に当て「この野郎！」とメガホンで頭を叩く。陸上競技では三段跳では日本有数と謳われた一年上の長谷川敬三氏がいた。彼は小学校六年生で朝日新聞主催の日本一の健康優良児であった。一年上の第三十一回卒業生の中には長谷川敬三氏のほかに阿座上新吾氏は府下随一の長距離水泳、広瀬潔氏は短距離水泳、杉原和光氏も府下随一の体操（同氏は航空特攻で戦死されたと云う）と名選手が揃っていた。

冬は全校揃って比叡山の兎狩り。伊東先生・五十嵐先生らの指導で勢子となってホーイホーイと汗だくで登り詰めたが、どうも兎でなくトン汁で舌つづみを打った。

武道では剣道と柔道に別れた。私は身体が弱小のため兄と同じく剣道をならった。柔道の三好正三先生は堂々たる体躯の偉

丈夫で体操で挫いた私の手指を優しく治療して頂いた。剣道は私と同郷の松本勇先生であった。これが剣道の達人かと思うほどの細身白せきの美男子であった。同期には高岡渉、浅田克己、春日文男、難波悟など錚々たる剣道の達人が、綺羅星のごとく居並んでいた。私は短身小柄で相手の面や籠手・胴などが打ち込めるはずがなく、がむしゃらに相手の脚ばかり叩いていた。同郷の松本先生のご最良でか同級の副級長青柳滋郎君との試験ではシャモの喧嘩のごときなぐりあいも評価していただいた。一度自分の腕を試そうと三年生の時の難波悟君に相手して頂いた。おとなに成長した堂々たる体格の難波君にこどもの私は押しまくられるだけで最後は組み伏せられて面ごと頭をねじ曲げられた。「参った!」と手で難波君に合図した。今更ながらに身の程を知らされた。

教練では京都第十六師団から現役の士官が配属され前記の予備曹長の教官たちを指揮していた。中学校級では少佐か大尉、中尉程度であり私の入学当時の配属将校は前記の同級生青柳滋郎君（陸軍士官学校卒業後、中国で戦死した）のご父君青柳甲郎少佐であった。

教練では年に一回の京都師団の査閲が大変であった。三年の時の配属将校は仙波毅四郎大佐であった。大佐とはあるいは左遷されてこられたのかと噂されていたが、大声で怒鳴りつける

大変「恐ろしい」軍人であった。この時の査閲に備えた全校挙げての教練の訓練は凄まじいものであった。文官の教官よりも武官の勢威が優勢時でもあった。その訓練をゲートル履きで一列に並んで参観する藤森勝郎校長先生（公民・アダ名カブラ、謹厳そのもののお人柄で長期の勤続で府下随一の名校長と謳われておられた。そのご長男俊郎氏は京一中出身で私の高校の先輩であり、警察界の上司であったが、夭折された。）細見重雄教頭先生、絹笠梅次郎先生などのうちひしがれたようなお姿はこどもころにも痛々しかった。（不思議にも三年生の小隊長であった私は仙波大佐から名指しで激賞を受けた）

三年生は丁度こどもと大人の端境期であった。朝礼など級の整列は短身を先頭に長身へと並ぶ。級長の私は最後列に立つので隣りの最長身の級友の肩までしか届かない。既におとなになったゴンタの猛者連の級友たちになめられぬように常に隣りの最長身の級友を私の庇護者に仕立てた。この時の庇護者岩室勝久君は病気で一年落第してきたがまことに心の優しい級友であった。このおとなの岩室君からこどもの私はマスターベーションを教わった。昼休みの教室でまだこどもの級友がおとなの級友の猛者数人に机の上に押し上げられ、おもむろにズボンをずりさげられ「解剖」されかけている。「カッチン！助けてくれ」と悲鳴を挙げられても近づくと私まで強チンされかねない。「堪

忍してやれや」と忠告するのが精一杯。しかし決して陰惨なイジメではない。ユーモアすら感じられた。

あるおとなの級友が稚拙な春画の巻物を下駄箱に隠し持っていた。これが猛者連に見え、追い掛け合った。私もチラリと盗み見した。官女と坊主の一こまは今も眼に焼き付いている。

当時、久高唯昌先生（国語・アダ名テッペン）にも習った。著名な識見で物静かな聖人のようなお人柄であった。級の猛者連が剣道の竹刀の竹の一片をグウとしなわせて教室の扉と壁の間に挟み込んだ。シズシズと廊下を歩いてこられた先生が扉に手を掛けられてもピクともしない。力一杯開こうとされた瞬間バネのように跳ね返った扉に挟まった先生は一言も言わず教員室にもどられた。無論、級長の私と副級長の京極漠君（由緒ある良家の出身でおとなになった立派な体躯と明朗な人柄で猛者連にも慕われていた。四年で陸軍士官学校に入った）は博物の教員室におられた受持ちの清水初太郎先生に呼び出された。文句なしに二人は一時間廊下に立つ罰を自らうけた。

大人の猛者諸君は放課後プールの脇に屯して「カッチンじゃわからんじやろう」と府立第二高女の女学生の品定めを噂しあっていた。時には島原の遊郭の話も出た。

なお私たちが中学校を卒業した昭和十六年十二月八日大東亜戦争（太平洋戦争）勃発。敗戦の気運も濃くなった昭和十八年

は二十才で徴兵、文化系の大学、専門学校の学生は学徒動員の年であった。同期からは陸軍士官学校、陸軍経理学校、海軍兵学校、海軍機関学校に八人（？）が進学したが、徴兵された級友を含め十二名が戦死した。第三十一回卒業生の俊才山鹿悦三氏は私より一期上で同じ第三高等学校、東京帝国大学法学部に進まれたが学徒動員で入隊。航空特攻を志願されて沖縄海面で散華された。

こどもとおとなの端境期を共にしながら、同じ教室に学び、戯れ、村田銃を担いでのオイッチニの教練、剣道、柔道に汗を流しつつ、共に励まし、助け合う友情の深まりに歓喜する中学時代であった。朝に仰ぐ秀嶺愛宕、夕べに掬ぶ清流桂。洛西の地の学び舎に咲かした私たちの大輪の花に寄せて。

付記 畏友山鹿悦三氏（京三中三十一回）の壮絶な特攻戦死

同氏は京三中で私の一年先輩で在学中は終始級長であったが、第三高等学校文科甲類から東京帝国大学法学部に進学されたが、三高時代は私と同じ「応援団」に所属し、対一高戦に備えて旗を振り応援歌を高唱していた仲であった。昭和十八年秋の「学徒動員」で当時誰もが憧れた海軍航空を志願され、二等水兵として本籍地の海兵団（舞鶴か？）に入隊、（この学徒動員で海軍一万七千人、陸軍八万人が動員された）翌年一月の予

備学生試験に合格。希望どおり第十四期海軍飛行科（操縦・偵察）専修予備学生を命ぜられた。（約三千三百名、四割は不合格）（予備とは海軍兵学校、海軍機関学校の正規将校の現役に対する「予備員」。前期の第十三期予備学生は大学卒業後海軍飛行科に志願してきた者、約五千名採用。それ以前は「大艦巨砲主義」で航空採用は年間百名程度であったが、比島沖海戦等で航空母艦や大量の練達パイロットを失い、急遽、学徒の予備学生、中学出身の予科練習生から大量のパイロット養成となった。山鹿氏は土浦航空隊で基礎訓練を受け、適性検査では「操縦」「偵察」「要務」のうち「偵察」要員（搭乗員）とされた。次いで徳島航空隊で厳しい実地訓練後、さらに宇佐航空隊で九七艦攻機（艦上攻撃機、本来は空母搭載機で魚雷攻撃用、「操縦」「偵察」「電信」の三人乗り。搭載爆弾八百キロ）搭乗。当時、すでに海軍主力は全滅、比島、硫黄島陥落、戦艦「大和」特攻。沖縄攻防戦に対応して第五航艦司令部は全員特攻の「菊水作戦」を発令。昭和二十年四月六日の「菊水一号作戦」に次ぐ五月四日早朝〇五・一〇「菊水五号作戦」に宇佐航空隊「八幡振武隊」四機の一番機（偵察員）として串良基地から出撃。〇八・三〇頃「我巡洋艦に体当たり」と送信してきた。

因みに海軍第十四期飛行予備学生総員三三三三名中、戦没者四十一名うち特攻戦死者一六〇名（操縦一二八名、偵察三二名）。